

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第149号

柿生郷土史料館 10周年を記念して

柿生中学校 校長

柿生郷土史料館 館長 田中眞砂美

柿生郷土史料館は平成22年の新校舎落成とともに開館し、10周年を迎えました。開館当時の地域に根差した活動を軸とした史料館の運営体制は、今日も変わりなく脈々と受け継がれ、情報・研究紙である「柿生文化」も、本年度中に150号を数える程に充実しています。

史料館では、届けられる柿生地域の文化財をお預かりしたり、柿生地域をゆかりとする歴史を古代から近世まで訪ねることで広く日本の国づくりにまで言及する、工夫を凝らした企画展の開催や、時期に応じたカルチャーセミナーの開催など、その役割は文化財の展示だけを求められているわけではありません。このように、史料館が生き生きと活動を続けていることの裏側には、この史料館を大切に、よりよくしていこうとする地域の皆様の変わりない熱いご支援が、この10年の間に積み重ねられてきたものと、深く御礼申し上げます。

また、各方面から折々にメッセージもいただいております。「柿生文化」に寄稿していただいております地域の歴史は、そのまま、今につながる伝統となって生活の中に生きていることや、柿生郷土史料館が川崎の北部に位置し、これからも郷土の歴史や文化を伝承していくことを期待されていることなどのお話を伺うたびに、「柿生文化」が多くの方に読み親しまれていることや、寄稿していただいたり、印刷製本していただき、送付していただくことまで、多くの方の手を経ていることに改めて感謝する次第です。

これからも、この柿生郷土史料館が柿生地域の歴史と文化を継承し、さらに次の時代につないでいく存在となりますよう、皆様のさらなるご支援をよろしくお願いいたします。

柿生郷土史料館 事始め

板倉敏郎(元柿生中学校校長・柿生郷土史料館設立者)

柿生郷土史料館開館4年前から史料館の活動が開始されました。第1回「カルチャーセミナー」は平成18年5月に開講されました。『柿生周辺における古代遺跡を訪ねて』という題で市民ミュージアムの浜田晋介氏にご講演頂きました。確か旧校舎1階の技術室が会場だったと記憶しています。柿生周辺で発掘された縄文土器や石器等の実物を手に興味深げに眺めていた皆さん方の姿が思い出されます。この「実物を手に」という姿が史料館の「実物コーナー」の原点にもなっています。



第8回セミナーで講演される、ありし日の小島一也氏

参加した、皆さん方が非常に強い興味関心をお持ちになっていた背景に、昭和30年代頃、宅地造成地に行くと土器や石器がよく転がっていたものでした。それらを収集して宝物にしていた方も多かったようです。当館の収蔵品も、これ等の方々から寄贈して頂いたものがたくさんあります。古代人の思いが現代に繋がったように感じました。

そして、開館2年前の平成20年7月に柿生郷土史料館情報・研究誌として「柿生文化」が発刊されました。当時は、B4版二つ折り裏表でした。創刊号には小島一也氏の第8回カルチャーセミナー『柿生のルーツを語る』の講演報告が掲載されています。懐かしい小島氏の写真も載っています。また中西望介氏の「第9回カルチャーセミナー」テーマ『石造物に見る柿生・岡上の中世から近世初期の姿』の講演内容が掲載されています。中西氏には現在、毎号、当紙面に寄稿して頂いており、大変お世話になっております。

このように、柿生郷土史料館は、開館以前から研究者の方々、地域の皆様、柿生中学校の先生方等、大変多くの方々によって支えられてきました。深く感謝申し上げます。

鶴見川流域の中世
その9

謎の深い前滝口榎下重兼たち

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

10年ほど前に京都在住の中世史研究者N氏から手紙をいただいた事があった。N氏は中世武士団研究に貴族の日記を活用する手法で目覚ましい業績をあげていた。手紙には「『吾妻鏡』建久5年(1194)8月20日条にある前滝口榎下重兼は鶴見川流域の武士の可能性を考えてみたが、それを直接証拠だてる史料に欠ける。傍証として重兼の「重」は武蔵国の武士団である秩父平氏の通字であること。榎下という地名を武蔵国内で探すと都筑郡に榎下郷であることがあげられる。付近には麻生郷があるので、地元にいる私に意見を求めたい」という内容であった。その時は芳しい返事を出さなかったように記憶しているが、頭の片隅にこの問いかけが残っているので、この機会にもう一度考えてみたい。

では『吾妻鏡』を見よう。建久5年(1194)8月20日、甲斐源氏の遠江守安田義定の伴類(一味)の武士達が名越辺において処刑された。武士の名前は前滝口榎下重兼、前右馬允宮道遠式、麻生平太胤国、柴藤三郎、武藤五郎であった。この事件の前日に反逆の咎で安田義定は梟首されている(『吾妻鏡』)。

榎下重兼らが一味同心した甲斐源氏の安田義定とは、いかなる人物なのか見ることにしよう。義定ら甲斐源氏は源頼朝の拳兵と前後して拳兵して、富士川の戦いでは甲斐源氏の軍勢は4万余の大軍勢で平維盛軍を圧倒し敗走させて、駿河・遠江を支配下におさめている。拳兵の段階では甲斐源氏の軍事力は頼朝のそれを凌いでいた。義定は遠江守護と遠江守を兼帯して、頼朝から半ば独立した存在であった。

平家を壇之浦で滅ぼし、奥州藤原氏を倒して鎌倉幕府の基礎が固まると、いささかでも頼朝に対抗できそうな人物は粛清されていった。建久4年8月17日には平家追討に大功のあった弟の範頼が謀反の疑いで伊豆に配流されている。同年11月28日に義定の子息越後守義資が頼朝の御側に仕える女性に艶書を出した罪に問われて梟首されている(『吾妻鏡』)。さらに、義定が子息義資の死を嘆き悲しむと、その言葉尻を捕らえて梟首して、その一味である榎下重兼らも処刑している。

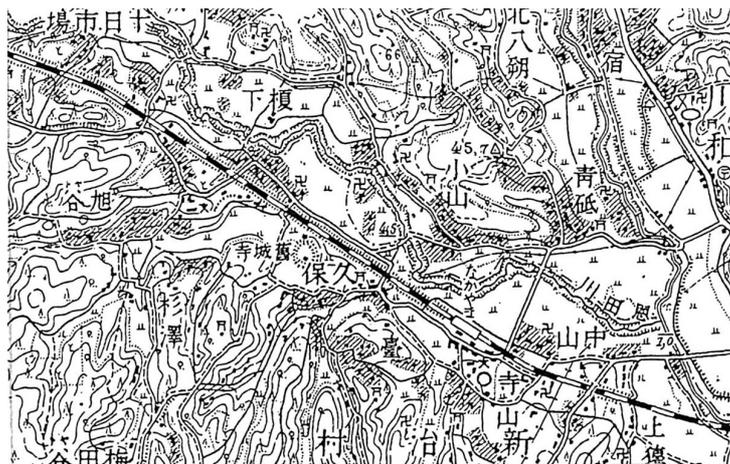
榎下重兼は天皇近侍の武力である滝口に任じられている事から相当な武士である。榎下重兼はどここの武士であろうか。地名と人名で調べてみた。安田義定の根拠地である甲斐国や守護と国司を兼帯して支配した遠江国は、最も可能性が高いと思われるのでその痕跡を調べてみたが管見の限り見当たらない。重兼の「重」は秩父平氏の通字であるので、秩父平氏関連の系図類に当たったが重兼は記されてなかった。視点を変えて「重兼」を系図類で検索してみると「武蔵七党系図」の横山党に沢田氏・糟谷氏、「岡部系図」の横山党に藍原氏、「武蔵七党系図」の猪俣党に横瀬氏、「小林系図」の小林氏に重兼を見出すが、いずれも榎下を名乗っていない。文献史料での検討は新たな史料が発見されない限り、これ以上前に進むことが出来ないのが現状である。

地名の榎下について検索すると、武蔵国の地名では榎下の地名は都筑郡榎下郷だけであった。榎下郷は江戸時代の久保・寺山・台・中山・小山・十日市場の村々を含む大きな郷村である。榎下郷の史料はどこまで遡ることが出来るのだろうか。それは「三宝院伝法血脈」に室町時代の文明6年(1474)11月18日に印融が弟子の融恵と融弁に「武州小机保榎下観護寺」において付法する記事が初見である。地名でも鎌倉時代に遡ることが出来ない。

横浜線の中山駅の北西1kmには中世城郭の榎下城跡があり、恩田川沿いの沖積地には観護寺がある。城址西側に位置する神明神社脇の道は「鎌倉道」と言われている。城址の東側に所在する杉山神社の脇にある旧道は、白根を通り鎌倉街道上道に通じる古道である。郷の南端には中原街道や保土谷方面に通じる古道が通っている。榎下郷は複数の道路が交わる交差点であった。また、付近の寺院には鎌倉期の大型板碑があったと伝えられている。このように様々な状況証拠はあるのだが、決め手に欠いている。厳密に考えると、榎下重兼を鶴見川流域の武士とするにはいささか無理がある。麻生の地名を名乗る麻生胤国についても同様である。

【訂正】147号の13行目と図版の榎下・麻生は削除する。

(つづく)



榎下郷周辺の地図 榎下の地名が記されている

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育(5)

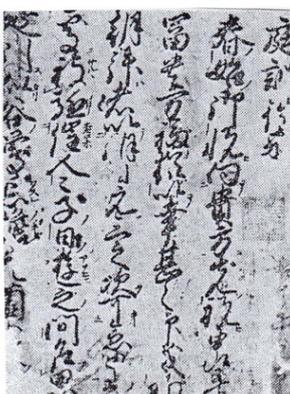
小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆寺子屋の展開過程 その3 寺子屋の教育課程◆

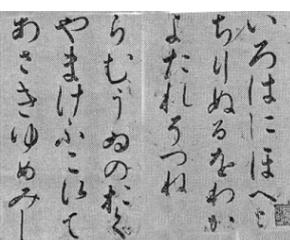
寺子屋では、読み書き計算を中心とした教育が行われたとされるのですが、商人や職人の多い都市部はともかく、農村部では、計数(ソロバン)の訓練は行わない寺子屋も多かったのです。例えば青森県の津軽地方では、計数も教えた寺子屋は53校、計数は教えなかった寺子屋は101校と、およそ3分の2の寺子屋が読み書きのみで、計数(ソロバン)の授業を行っていませんでした。この点について、全国的な動向を『日本教育史資料』から抜き出してみると、読み書きのみを教えている寺子屋が全体の約59%の9,121校、読み書きに計数(ソロバン)を加えた寺子屋は全体の約21%にあたる3,244校でした。学習分野が不明な寺子屋が全体の16%強にあたる2,524校あるので、残りおよそ4%の640校が本格的な学問に近い内容にまで踏み込んだ、いわば私塾化した寺子屋ということになります。こうした私塾化した寺子屋は1830年代(天保年間)以降、急速に増えてきます。幕末における国学の隆盛と符合する現象です。

第3回に、19世紀に入ると年と共に寺子屋の開設が増えていく様子を記しましたが、この時期から寺子屋の開設は、都市部から農村部へと広がりを見せはじめ、塾の師匠は、名主や富農層が務め、貧農や小作農の子ども達の授業料は免除する措置などがとられたりしたのですが、長野県諏訪郡の笹原新田村のケースには驚かされます。こうなのです。笹原新田村では、文政年間に入った頃(文政元年=1818年)、村民の要望もあって、寺子屋の開設をめざして、読み書きに長じた師匠を探すことになったのです。ところが村内では師匠たるに相応しい人物を見つけることが出来ず、困り果てた村方三役(名主、組頭、百姓代)は、文政6年(1824年)に山梨県巨摩郡御嶽山の御師で隠居の身であった内藤常陸助(ひたちのすけ)なる人物を、3年の契約で寺子屋師匠として雇い入れたのです。この契約にあたり、笹原新田村の年寄(=組頭)市之丞と名主奥右衛門から要請があり、「御嶽山の神主内藤出雲と塩入肥後が常陸助の身元引受人となって、常陸助が村内の子ども達を預かり、初歩の学習の面倒をみることに、その代償として村側は、常陸助の生活の全てを支えられる程度の米穀を提供する」とした証文が作られたのです。この試みは、双方に満足のゆくものだったと見え、3年契約は8度も更新され、常陸助は弘化4(1847)年まで21年間、村の寺子屋の師匠を務めています。常陸助が退任した弘化4年以降は、伊那郡福与村の各左衛門が後任となり、彼もまた何度か契約を更新しています(『長野県教育史第8巻、史料編2』)。

この例は、寺子年齢の子供のいる家庭の負担だけでは、とても寺子屋を支えていくことは出来ないもので、村の負担



『庭訓往来』の巻頭ページ



学習はじめ『いろは』の手習い帖

で寺子屋を維持することを考え、それを実行したこと。そのことに対して村人から強い反対はなかった(だから長く続けることが出来た)ことを示しています。まさに村落共同体の丸抱えで、村の寺子屋を維持したのです。ここには、明治時代に始まる公立小学校の萌芽が姿を現しているように思います。

寺子屋では、3年程度通学して、一通りの読み書きの場合によってはソロバンも含めて)が出来るとなると、それ以上の通塾をやめてしまう生徒も多く、特に女兒にそうした傾向が強かったのですが、さらに学習を続ける塾生は、読本の訓練を受けました。文章を読み、その意味するところを学び、知識を蓄えるのです。習字用を含め読本の手本として編まれたのが『庭訓往来』をはじめとする往来物です。往来物は数多く、『農業往来』『商人往来』といった職業に即したことから、『松山往来』『松本往来』といった地域に特化したものまで、数十種類が出版されていました。また地理の学習も行われ、寺子屋の存在する町や村の名前を中心に、塾生らの生活圏にある近在の町村名を中心に、特産品から地域生活の実情、さらには人情風俗まで活写した教材も作られていました。レヴェルの高い寺子屋も幕末維新时期には、次第に増えていたのです。(続く)

追記 史料館では、『庭訓往来』他数点の往来物を常設展示しております。是非お手に取ってご覧ください。



農村向け往来物として広く使われた『農業往来』

多摩丘陵に残る
義経の面影 - 13

亀井六郎重清と義経 (その1)

麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

歌舞伎の世界では、亀井六郎重清は義経の四天王の一人として重要な立場に立っています。彼の出生は、2説ありますが謎が多くはつきりしません。

一つは、紀州藤白にある鈴木家の出とされています。この藤白鈴木家は日本の社家・武家の一つで、本姓は穂積氏の流れを汲む紀州の名門です。藤白神社の社家であり紀伊国の国人領主。熊野速玉大社の禰宜・穂積国興(平安時代前期の人)の次男 鈴木基行が藤白鈴木氏の始祖となったといわれています。熊野地方で勢力を誇った熊野三党(榎本、宇井、鈴木)の一つ、また熊野八庄司の一つとされ家紋は穂積氏に由来する『抱き稲』、替紋は熊野別当の藤原氏に由来するとされる『下り藤』、幕門は『八咫鳥』です。

この藤白鈴木家のルーツを探ると、神武天皇より前に大和入りをした饒速日命(ニギハヤヒ)が祖先と伝わる神別氏族で、物部氏の正統とされ、熊野国造家や末羅国造家とは同族とされています。藤白鈴木家の鈴木基行を初代とすると、10代目が鈴木重倫(シゲノリ)で、源義朝に従って保元の乱、平治の乱に戦い、まだ幼かった鈴木三郎重家・六郎重清(亀井六郎重清)らを弟の鈴木重善(シゲヨシ)に託し戦死したといわれています。

鈴木三郎重家は11代当主となり、弟に弓の名人と伝わる亀井六郎重清がいました。『義経記』には義経に最後まで従った主従の一人として登場するほか、『源平盛衰記』にも義経郎党として鈴木重家の名が見られます。熊野に住んでいた源行家(重家・重清の叔父)との関係から義経に従ったともいわれています。治承・寿永の乱では義経に従って一の谷の戦い、屋島の戦いなどで軍功を立てて武名を馳せ、壇ノ浦の戦いでは熊野水軍を率いて源氏の勝利に貢献しました。また、重家は義経から久国の太刀を賜ったとされています(穂積姓鈴木系譜)。

平家滅亡後、鈴木重家は源頼朝から甲斐国に領地を与えられて安泰を得ていました。しかし、後に義経が頼朝と対立して奥州に逃れた際、義経のことが気になり、所領を捨てて長年連れ添った妻も熊野に残して腹巻(鎧の一種)だけを持って弟の亀井重清、叔父の鈴木重善と共に奥州行を決意し、文治5年(1189)に奥州に向かった。その奥州下りの途中に一度捕えられて、頼朝の前に引かれた時には、頼朝に堂々と義経のぬれぎぬを弁明し功を論じたとされています。



小森御前社(志津川小森)

重家の妻・小森御前は、重家が奥州に向かう際は、子を身ごもっていたために紀州に残されましたが、夫を慕いわずかな家来を連れて後を追った。しかし、平泉に向かう途中に志津川(現在の宮城県南三陸町)の地で夫が戦死したことを聞かされ、乳母とともに八幡川に身を投げて自殺したとされています。その最後を哀れんだ村人たちが同地に祠を建てたと伝わり、現在でも小森御前社として祀られています。しかし、この祠は東日本大震災の津波により倒壊流失してしまいましたが、現在東日本鉄道文化財団や雨後町の鈴木家子孫の方々の助力を得て、小森御前社再建実行委員会の手で神社の再建が進められています。

(この項続く)

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

10月 3・10・17・31日(毎土曜日)

11月 8・15・22日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (10月24日、11月29日は休館です)

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。

詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。